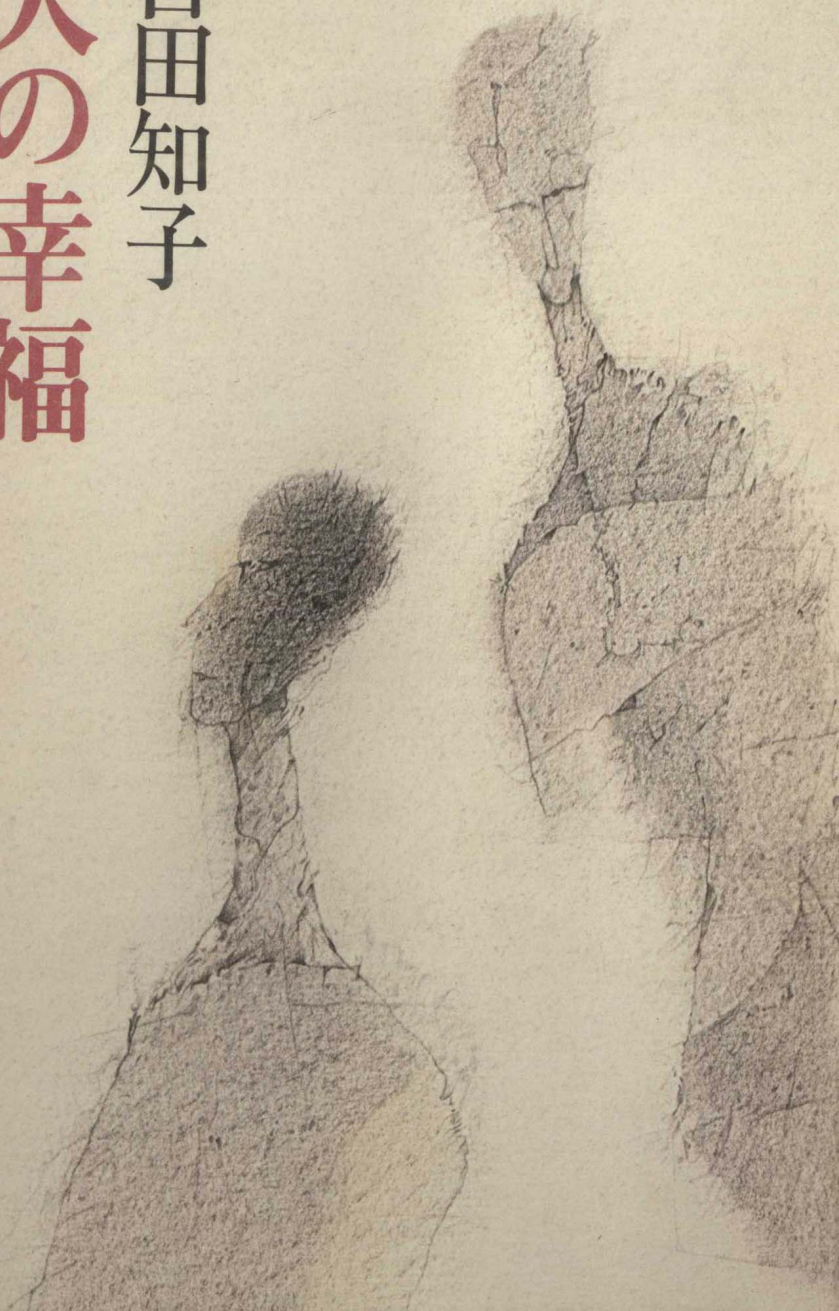
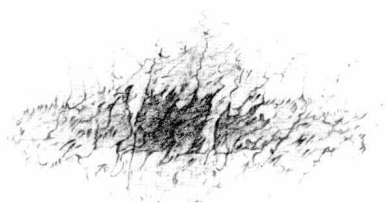


吉田知子
犬の幸福



犬の幸福

吉田知子



中央公論社

犬の幸福

●校印廃止
一九七九

定価九八〇円

昭和五十四年十月十五日初版印刷
昭和五十四年十月二十五日初版発行

著者 吉田知子

発行者 高梨 茂

印刷 三晃印刷

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七
電話(五六一)五九二一
振替東京二、三四

目次

犬の幸福

5

チチブ

66

曇天

94

乞食谷

120

ニュージールランド

152

平和日和

185

幸福な犬

212

犬の幸福

裝
幀
東
芳
純

犬の幸福

犬の幸福

――十六。高校二年だから。

――まだ子供なのに。

――そうでもないさ。

表の通りを自動車が唸りながら走り抜ける。エンジンの音が一瞬、救急車のサイレンに聞える。

――十六で殺されてしまうなんて。

――どうしてそんなことを言う。そうじゃないって言ったじゃないか。

――同じことだわ。

――彼女は病気だったんだ。

――あの子は病気になんかならない。

――子供だって病気になる。

私は耳の中のサイレンを聞いている。

昨日の昼すぎ、「ボウ、ボウ、ボウ」と言いながら家の前を通って行く男がいた。赤い顔をした大きな男で、両手を泳ぐような恰好にふりまわしている。その男が誰かわかったとき、へんな

気がした。平生、彼は知人に会っても、ちょっと頭をさげるだけで、ものを言ったことなどなかったのだ。道を歩くときも、白眼の多い義眼めいた眼を左右へ動かしたことはない。年中なかに腹をたてているようなおそろしい顔つきをしている。

その男が「ボウ、ボウ、ボウ」と、わけのわからぬ大声をだして歩いている。頬をふくらませ、口を丸くあげ、あんなに派手な身ぶりをしながら。

奥へ入って洗いのをしていると救急車のサイレンが近づいた。サイレンの音は一週間に何回か聞える。サイレンは家の前から西へ百メートルの三叉路まで行くと、どちらかへ曲る。だが、昨日のそのサイレンは、途中でおかしな具合にとぎれてしまった。いくら待っていても、もう何も聞えない。空耳だったのかも知れない。

まわりには何の音もしなくなっている。

——いくつなのかしら。あの子の父親。

——まだ四十前だろう。

——この、前の道を通ったのよ。大股に歩いて。……それから、救急車が来たわ。彼は首をふり、煙草に火をつける。

——自分の娘が殺されるなんて、あの人、考えたこと、なかったでしょうね。

——それはそうだろう。第一、娘は殺されたんじゃないんだからな。

——ええ……ええ、と私は頷く。

——どんな気持だったでしょう。

――なにが。

私は、ぼんやりする。彼の顔を見る。

――なにがって？

――だって、そう言ったじゃないか。……でも、いい。どっちだって。つまらんことだ。

私は煙草の煙を見ている。煙は、はじめは濃い重たげな塊だ。彼の口から出たり入ったりしてためらっている。それは、彼の唇の上、粗い疎な毛のはえた皮膚にまつわりつく。鼻筋や頬までくると煙はゆっくりと幾筋かにわかれ、そこで急激に細い曖昧な線になって天井に散らばる。その後を、すっかり薄くなった別の煙が追いかけるが、それは忽ち消えてしまう。

――十六で殺されるなんて。十六ぼっちで、と私は再び言う。彼は答えない。

私は身震いする。寒かった。夕食をすませたのは七時半だったのに、もう九時をすぎている。

――寒い……と私は言う。

――今日は暖かだった、と彼がすぐに応ずる。

――昼間なんか、夏みたいだった。居眠りしそうだって、皆、言ってた。

――だって寒いんだもの。

――どうかしてるんだろう。

彼は煙草を消して立ちあがり、二、三回両手を伸したり縮めたりする。

――じゃ、寝るか。

彼は私が蒲団を敷くのを手伝う。シーツの片端を払げる。肱が茶簞笥にあたって大きな音をた

てる。

寢床の中で、彼が言う。

——どっちなんだ。

私は黙っている。

——いいのか。……いいんだな。

私は男の背中を見ている。私の顔と彼の背中の間の十五センチの隙間から冷たい空気がしみこんでくる。それは、たゆたいながら奥のほうへ入りこみ、金属製の冷えきった板になって私の腹のまわりに巻きつく。

——いいんだな。あとで文句言うな、と彼がまた言う。その不機嫌な声で私は体を動かす。腰を揺すると体ぜんたいが重く波状にゆらめく。彼の胴に手をのせる。彼は向きをかえる。

——外国の本の翻訳をこの間見せてもらったんだが、と彼は言う。彼の手は単調に休みなく動いている。

——実に丁寧なものだった。図解つきなんだ。よくわからないところもあったが。……皆もそうらしい。

——そう言ったの。わからないって。

——言いはしないさ。……そこんところを指でさしたりしてた。

——じゃあ、他の人には、わかってるのかも知れない。

——それが、そうじゃないんだ。言わなくても通じる。

私たちは、しばらく黙っている。そのうち、彼の手の動きは次第にゆるやかになる。いつの間にか、それは止ってしまふ。

朝、眼をさましたとき、口の中に座布団が入っている感じがある。その厚ぼったさのまま、数秒、じっとしている。体は暖かい寢床の中で、まだとろけてい、冷たくなった顔だけがいやな感覚で鈍く醒めている。私は自分の舌を舐める。舌は焦げた芋の味がする。口の中でふくれあがっている。口じゅうが舌になっっている。舌はもはや舌ではなくて「悪い病氣」だ。息が熱い。私は隅のほうから順々に舌を嚙る。小さな痛みが、そこかしこの空間に、ふわふわと漂いはじめる。黄色の半透明の泡のような痛みを私は次々に製造していく。それをびっちり隙間なく並べてしまふと、もうすることがないので起きる。

朝は、温度は低いが寒くはない。私は素早く動きまわる。彼の洗顔用の湯を沸かし、トーストを焼き、牛乳とコーヒ―とバナナを盆にのせる。わざと大きな音をたてる。彼は、その音で眼をさます。

彼は七時に出かける。その後で犬の餌をつくる。仔犬がいるので、餌はこのごろは朝晩二回やる。犬は二歳で、毛の長い種類だ。生後二ヵ月するとき、電車で二時間かかる田舎からダンボールの箱にいれて連れてきた。途中で啼くのではないかと心配したが、ほとんど声をださなかった。裏庭で箱をあけると、小水や自分の嘔いたものにまみれて、よれよれになっていた。毛が体にはりついているので、ひどく貧弱にみえ、「雑種かも知れない」と彼は疑った。湯で体を拭いてや

っている間も、おとなしくしていた。

裏庭に面した雨戸をあけると犬たちが啼きはじめる。親犬は首を鎖に引っぱられながら尻をこちらへつきだし、それを忙しく左右へふりまわす。犬はだぶついた大きな腹をしているのに尻は小さい。薄茶の長い毛に蔽われた丸い尻が無器用に動く。犬は時々、首をねじ曲げて体ごしに人の顔を見る。

仔犬が生れたのは夜の九時頃だった。犬小屋で音がした。犬はよくいろいろな音をたてるが、それは今までに聞いたことのない音だった。音というよりは異様に切迫した気配といったほうがよいかも知れない。すぐに細い絹糸がもつれあっているような、かぼそい執拗な音がしはじめた。ピー、という複数の音が粒になってこぼれてき、それは消えもせず大きくもならない。

翌朝、見ると、犬は犬小屋と物置の間の地面にいた。腹の下に何匹か小さなものがうごめいている。その中に一匹、動かないのがある。しかし、親犬の向う側になっているので調べることができない。鎖をはずし、犬がそこを離れたすぎに取りあげた。やはり死んでいる。犬にみつからぬよう梅の木の下へ埋めた。犬は庭中を走りまわり、大声で吠えた。きちがいじみていた。初めて子を産んで興奮しているのか、それとも仔犬の数が足りないのに気づいて怒っているのか。どちらともわからない。

仔犬は四匹生れ、一匹は死に、二匹は貰われていった。残りの一匹も貰い手がついている。父親は雑種だが母犬がチャンピオンの直仔だから、ただならはしがる人もいる。

父親の濃い栗毛の雄犬は、まだこちらが仔犬の時分から始終遊びにきていた。犬小屋の前に寝

そべって、雌の仔犬が彼の頭を前足で叩いたり、唸って噛みついたりするのを悠然と受けている。十分か二十分すると、紫陽花に小水をひっかけて帰ってゆく。雌犬は大騒ぎして彼について行きたがる。何か喋っているとしたか思われぬ、ながい抑揚のある声で吠える。発情期になると、外出するときや夜は戸のある小屋にいられた。栗毛の犬もみつけしだい大声で追い払った。そのあと、気のせいか犬の腰が太くなった感じがした。知らない間にかかってしまったか、と観念したが、秋は、どうやら無事だった。

早春、客と話しながら庭を見ると、犬は栗毛の雄犬とつがっている最中だった。見たとたん、アッと叫んではだして庭へとびだした。が、もう手おくれだった。犬たちは、人が走り寄っても、それほど慌てない。二、三步よけただけだった。動けなかったのかもしれない。近くには石も棒も見当たらないので、いきなり力まかせに雄犬の頭を叩いた。彼は頭を左右へそらせた。四、五回叩いたが、こたえたふうもなく、まるで愛撫しているようにしかならない。物置のスコップが眼に入ったので取りに走った。そのすきに犬たちは離れ、雄犬は垣根の外へ出て行った。

——ああ、とうとう、と私は客に言った。

客は五十すぎの男だった。犬のほうは見なかった。私を見て笑った。

——まあ、しかたないね。

——ずいぶん気をつけていたのに。

客は、それまでモーターの話をしていた。この近辺のものなら全部知っている、と言った。相手の女のことは言わなかった。彼はその続きを言いはじめた。

——そのたびに、ちゃんと記録しておいた。なにかの役にたつかと思って。大学ノートへ。今度、持ってこようか。

——どうして。

——見たいでしょう。あんた、なんにも知らんのでしょ。実際、きてれつなしかけがあるからね。

——そうですか。

客は私の顔を見た。

——それがね、先だって奥サンにみつかったんだ。そのノートを。あれにはまいった。

——どうしたの、それで。

——みんな想像だと言った。なかなか信用しなかったけどね。

——でも、結局は信用したんでしょ。

——そりゃあ、まあ、そうだろう。他にどうしようもないから。

私たちは裏庭に面した縁側の椅子に腰かけていた。私は犬を見ていた。犬は鼻をあげて空気を嗅いでみたり、つまらなそうに土を掘ったりした。ようするに、あんなことがあっても犬は、ふだんと何も変りはなかった。あるいは、あの栗毛の犬との関係は何度目かだったのかもしれない。犬のことは何もわからない。

——見せてあげようかね、今度、と客がくりかえした。

午前八時十分。私はコールドクリームを顔になすりつける。まず頬へのぼし、そこから螺旋状に耳の前へ揉みあげる。口は半びらきになっている。力をいれて内側へ唇をまくりこんでいる。窓硝子の一番上から外の電線と隣家の橙の葉が見える。葉は微かに揺れている。私は鼻の両脇と口の周囲をマッサージする。

クリームは、こすっているうちに乾いて、なめらかさを失う。指でたっぷりすくいにとって額や目尻をさする。眼を閉じていると、顔はのっぺらぼうの、ぬらぬらした円になっている。どこを触ってもまるく、柔らかい。内側には生暖かい暗闇がある。まぶたを押えつけると藍色の巴が規則正しく左右へずれていく。指先が痛くなる。ガーゼでクリームを拭きとる。そのときガーゼに汚れがついていないと面白くないが、今日は充分に色がつく。そうすると、顔が少しは白くなっただろうと思う。

——神は、どういう役に立ちますか。

突然、子供の声が聞える。喋りながら前の道を通って行く。小学生たちの騒がしい登校時間。子供たちの甲高い声は何を言っているのか気にしたこともないのに、その幼い声だけがくっきりと際だって家の中へとびこんできた。くりかえしながら、声は遠くなっていく。

やっと、アクセントがおかしいのだと気がつく。神ではなくて紙なのだ。私は放心状態からさめて再び手を動かしはじめる。

洗面所から戻って鏡台の前に坐る。鏡面に、うっすらと汚れがついている。鏡の中の顔には黒子が十一ある。どれも同じ大きさの真黒な黒子なので黒胡麻をまいたように見える。顎の右下に

あるのだけ他のより大きい。乳液を塗る。眼の下がくろずんでいる。顔を鏡に近づける。それはカメレオンの下まぶたのようにふくれあがり、肌目は鱗状の絞り模様を画いている。眼尻から頬の上部へかけて派手やかな放射線形小皺が拡がり、もやもやした淡褐色のシミが湧いている。私は髪を縛っているゴム輪をはずす。梳かしながら、どうしようか、と迷う。工場は九時からだった。私は眼頭の凹みにコールドクリームが残っているのをみつける。そこだけ陰惨な光りかたをしている。ティッシュペーパーでこすりとりながら、「まだ間に合う」と考えている。一応半コートをハンガーからはずす。黒の長靴下を穿く。迷いながらも身支度をしている。行くのなら、もう出発していなければならない。冷えた素足に掌が当ると熱い。足が薄い布で蔽われていくのが気持ちよい。その上へズボンを穿く。セーターの上に半コートを羽織り、物置から自転車をはきだした。犬が見ている。慎重に数秒見ていてから吠えだす。しつっこく、いつまでも吠え続けている。

まだ、迷っている。

私は自転車をはいて、のろのろ歩いて行く。自転車を走らせると風が体のしんまで通って寒い。だが、全部歩くと四十分もかかる。それで不決断のまま乗ったり歩いたりする。毎朝、そうだ。途中で戻ってしまうこともある。工場がいやだというわけではない。金は必要だが、なければ飢え死にするというほどでもない。彼は私に渡す生活費の数倍の収入があるはずだった。「いい身分だ」とパート仲間のおばさんたちは言う。「あんたみたいな気まま勤めをしてみたいよ」

なんとなく、ふんざりがつかないのだった。